岳南朝日新聞　2022年1月16日

共助の輪拡大へ団結誓う

富士宮地区労福協

新年の集いで親睦深め

富士宮地区労働者福祉協議会（小林純一会長）は14日、富士宮市ひばりが丘の富嶽温泉花の湯で「第25回富士宮地区労福協新年の集い」を開催した。同会に所属する53人が出席し、新年度に向け団結を誓った。

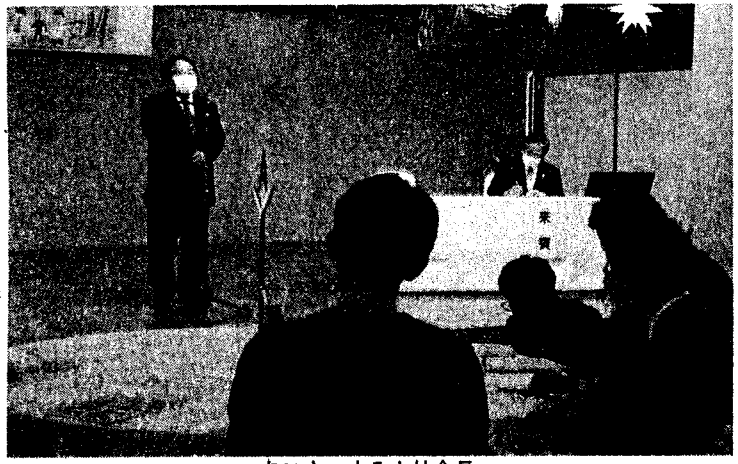
同団体は労働者の福祉要求の実現を通じて労働者家族の生活向上と安定を図り、真に平和で豊かな暮らしを保証する社会を創ることを念頭に活動を続けている。

新型コロナウイルスの影響で2年ぶりの開催となった同日は、例年よりも半数以下に参加人数を減らし、鏡開きは中止に。また食事、アルコールも控えた縮小した形で行われた。

来賓として訪れた須藤秀忠市長は「丑（うし）つまずき、寅（とら）千里を走るという経済の格言がある。新型コロナウイルスの影響で日常生活や業務など例外なく影響を受けたと思う。今年は新型コロナウイルスと共生していく新しい生活様式が広がったという意味で、トラが千里を走るように経済が活性化し、金融活動に活気が出てほしいと願う」と語った。また同市が市制施行80周年であることから「記念すべき年を迎えられたのは多くの先人たちと働く人たちがあってこそ。市民こぞってお祝いし、さまざまな事業を展開したい」と述べた。

あいさつで小林会長は「自分なりに努力をする自助、自分ではどうにもならないときにみんなで助け合う共助、それでも問題が解決できない場合の公助。労福協はこのなかの共助の役目を果たしている。コロナ禍で不自由なこともあると思うが、こういうときこそ団体を通じて共助の輪を広げ、助け合いながらコロナに立ち向かっていきたい」と呼びかけた。

イベント内では、ラケットリレーなどのゲームや抽選会が行われ、感染症対策をした中でも会員同士で親睦を深め、今後の活動への意欲を高めていた。



あいさつする小林会長

レクリエーションを楽しむ会員